

2017.10
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

10号

第39巻

No.339



オクトリカブト *Aconitum japonicum* Thunb. (キンボウゲ科 *Ranunculaceae*)

生 薬

ブシ（附子） 秋に掘り起こし、母根から子根をはずし、水洗しそのまま乾燥したものを日本では川烏頭と言い、減毒処理としてニガリと食塩の溶液に浸した後乾燥したものを塩附子、外皮を剥ぎ縦割りしてニガリ水に漬け、煮沸後乾燥したものを炮附子、塩水に浸した後石灰をまぶして乾燥したものを白河附子と言う。現在製剤用として高圧蒸気処理後乾燥する加工附子も用いられている。

成 分

アコニチン系アルカロイド：aconitine, hypaconitine, mesaconitine, jasaconitine, neopelline、アチシン系アルカロイド：atisine, kobusine, pseudokobusine, telatisine, hypognavine, ignavine、強心成分：hygenamine, coryneine 等

効 能

強心、利尿、鎮痛薬として、代謝機能失調、身体四肢関節の麻痺・疼痛、虚弱体質者の腹痛、下痢、失精など内臓諸器官の弛緩などの症状を目的に温脾湯、桂皮加附子湯、牛車腎気湯、芍薬甘草附子湯、真武湯、八味地黄丸、附子湯などの漢方処方に配合される。



生薬 オクトリカブト

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



トリカブト属のトリカブト亜属には国内に約40種が自生していると言われ、オクトリカブトは北海道から東北北部の低地に分布し、茎は直立または湾曲し、高さ80-180cmになる大型植物です。葉は倒卵菱形で5中裂し、長さ5-11cmと大きく、花は7-9月頃に繸状花を散房状に咲かせます。虫媒花としては高度に特殊化した構造の花をつけます。花は外見できる兜状の1個の頂萼片と2個の側萼片、2個の下萼片の5個萼片からなり、花弁は頂萼片の内側に2個あり、側萼片の内側にある雌しべと雄しべの塊を花車に見立て、花弁はそれを曳く2羽の鳩のようにも見えます。鳩の頭の部分が距であり、そこに

大量の蜜を分泌するため、長い口吻を持ったマルハナバチ類が潜り込むようにして蜜を吸い、大量の花粉を腹部に付け、他の花に受粉する構造になっていると考えられています。この花の形が雅楽の伶人(楽人)の被る鳥冠に似ていることから「トリカブト」と名づけられたと言われています。英名のhelmet flower(中世の騎士の兜)、monkshood(僧のかぶりもの)やドイツ名のeisenhut(鉄兜)はトリカブトと同じ意味で名づけられたものと考えられます。地下の塊根は倒円錐状で中央の母根と短い根茎でつながる子根からなります。『本草綱目』(1590)に「その母を名づけて鳥頭という。鳥の頭に似ているという形容だ。鳥頭に附いて生ずるものを附子という」とあり、漢名の語源となっています。

トリカブトの毒性はよく知られています。ここ数年を見てもニリンソウ(*Anemone flaccida*)やモミジガサ(*Parasenecio delphinifolius*)などの山菜と間違える食中毒が年に1-3件起きています。中毒すると唇や舌のしびれに始まり、手足のしびれ、嘔吐、腹痛、下痢、血圧低下などをおこします。この毒をアイヌは狩猟や武器として用いました。平安末期から鎌倉時代の歌人藤原顕輔(1090-1155)の歌「あさましやちしまのえぞの つくるなる どくきのやこそ ひまはもるなれ」と詠われ、早くからアイヌが毒矢の文化を持っていたことが伺えます。アイヌが狩猟用として用いた自動発射式の毒矢は明治時代まで用いられ、明治9年に開拓使が禁止をしたことにより衰退していきました。

中国春秋時代の晋国(BC11世紀-BC376)について記した歴史書『国語晋語』にトリカブトが毒薬として用いられたと記されて以来、現在に至るまで毒薬として用いられた記載が東西を問わず数多くあります。薬としても莊子(BC369-286)の『雑編徐無鬼』に「それは時に主薬になるものである」と、『淮南子』(BC139)には「良医がこれを珍藏するのは、使い道があるからである」と述べられています。後漢末の張仲景(150?-219)が著した『傷寒論』の20処方、同じく『金匱要略』の29処方に附子が配合されています。『神農本草経』や『名医別録』(502-536)にも収載され、詳しく薬効が記されています。また『図経本草』の著者、蘇頌(1020-1101)が栽培法や減毒法を記載していることから栽培化も進んでいたことが伺えます。

日本では『多識編』(1612)に「附子、於宇、今俗に云う、布須伊毛(ふすいも)」とあり、江戸時代初期まで和名を於宇と呼んでいたようです。トリカブトという言葉が使われ出したのはやはり江戸時代前期の『花壇地錦抄』(1695)で「芫菀(とりかぶと)」、『和漢三歳図会』(1713)にも「草烏頭、俗に名を止利加布止(とりかふと)と呼ぶ」とあり、以降植物名トリカブトが使われるようになりました。江戸中期の『本草綱目啓蒙』(1803)には「奥州南部、松前及び蝦夷の産、根肥大になりやすし。これを栽て附子をとるべし」とあり、国産で良質なものが取れるようになりました。